特集 3

ことばの本質を探る言語学的アプローチ

稲田俊明先生は、2018年３月末をもって長崎大学を離職されます。ここに、心より稲田先生のご尽力に感謝の気持ちを込めて、本記念特集を捧げます。

稲田先生は、長年九州大学で教鞭を取られ、2012年４月に初代言語教育研究センター長として着任されました。九州大学では、文学部部長、文学研究科科長などの要職を歴任しておられます。また、言語教育研究センター創設から６年間、長崎大学における外国語教育改革にご尽力くださいました。稲田先生が着任されてからの６年の間に長崎大学での外国語教育は大きく前進しております。発信型コミュニケーション能力の増進を目的に外国語プレゼンテーションコンテストを実施されました。今年で４回目のコンテストになりました。また、長崎大学学生の自発的な英語学習を支援する English Café や E-Lounge を創設されました。さらに、稲田先生は、グローバル人材を育成するために、国際リエゾン機構、モンタナ大学と連携し、SCAS プログラム、グローバル・プラスプログラムの開設にも深く関わっておられます。今後、これらのプログラムをさらに発展させていく責任が私たちにあることを思うと、責任の重さを感じます。

長崎大学の長年の夢であった文系学部（多文化社会学部）の新設に関しては、設置準備段階から多大なるご協力、ご指導をいただきました。多文化社会学部創設後は、共生文化コースの現代言語理論をご担当いただき、現在に至っております。先生の講義を受講している学生の中には、言語学への興味・関心が喚起され、言語学分野での大学院進学を考える学生も出てきております。また、稲田先生の講義の評判を聞き、別コースの学生が勉強会の立ち上げを申し出るなど、稲田先生が学問的に学生に与えた影響は大きいと言わざるを得ません。稲田先生は、ご自身の貴重な研究時間を割いてまでも学生の指導をしておられ、私たち教員が研究者、教育者として見習わなければならないことが沢山あります。稲田先生のお人柄に惹かれ、言語学を学ぶ魅力について語られる先生の知識の豊富さと学びの手ほどきに魅了される学生が多いことは言うまでもありません。英語学・言語学・応用言語学を研究対象としている本論集の執筆者も稲田先生の魅力に惹かれている研究者です。

私（西原）と稲田先生との出会いは、今から30年前に遡ります。当時大学院の２年生であった私が九州地区の学会で発表を行った際に、初めて稲田先生にお目

にかかりました。拙い私の発表もお聞きくださり、コメントまで頂戴しました。問題点を指摘されるのではなく、どこの部分を掘り下げてみていくと面白い事実の発見につながるか、理論的にはどのような方向性に発展させられるか等のコメントをいただいた記憶があります。その時に私が心に抱いたものは、「いつか稲田先生のような研究者になりたい。先生の近くで研究を行いたい。」という気持ちであったことを鮮明に覚えております。その後、幸運なことに福岡での研究会で先生とともに学ぶ機会を得ることができました。また、長崎大学でのこの６年間は同じ職場で働くという幸運にも恵まれました。稲田先生の言語学者・英語学者としてのお姿は、私の中では30年前のお姿と変わりありません。私たちも先生のようにいつまでも若々しく、学生の知的好奇心を刺激できる存在でありたいと思います。

本特集にも一言ふれておきたいと思います。稲田先生は、生成理論文法を理論的枠組みとしてこれまで研究に打ち込んでこられました。先生の研究の中に市川三喜賞を受賞された『補文の構造』という研究書があります。この著書に見られるように、先生の研究には、一貫して多くの言語事実の収集、理論的裏付けと説得力のある分析と考察が含まれています。言語教育研究センターと多文化社会学部に籍をおく英語教員、英語教育コーチングフェローは、先生の研究姿勢を手本として研究を行っていると感じております。

本特集には、稲田先生の研究や研究姿勢を良き手本として生み出された５編の論考が収められています。Cutrone 氏の論考は、応用言語学の分野で世界的に有名な Rod　Ellis 教授とのインタービューから、応用言語学者が持つべき姿、日本における英語教育関係者が持つべき視座について述べられています。Rod　Ellis 教授を長崎の地にお招きできたのも稲田先生の功績の一つです。楊　氏の論考は、実験音声学の手法を用い、中国語の３種類の曖昧な疑問文に対する音声分析を行ったものです。合成と聞き分け実験を通して詳細な音響分析を行い、それによって中国語疑問文の曖昧さを取り除く音声上の特徴を明らかにしています。谷川氏の論考は、極小主義の枠組みにおける派生の仕組みを用いて、wh-移動、焦点移動、話題移動の３つの移動に新しい分析を提案しています。林田氏と西原の共著による論考は、動詞補部に関する語法書、辞書の情報が妥当なものか、英語学習者は動詞補部情報を内在化させているかという観点から論じたコーパス研究です。西原が研究テーマ、コーパス資料収集の方向性を定め、実質的な資料収集と分析を林田氏が行い、分析内容を両名で再度検討してまとめています。西原の論考は、time-away 構文の統語的、意味的特徴について考察しています。先行研究を概観し、コーパスから得られる言語事実に基づいて先行研究の問題点を明らかにする

とともに、動詞の意味素性と time-away 構文の容認可能性について論じています。

長崎大学を離れた後も健康に留意され、私たち後進の良き師として、稲田先生がさらにご活躍いただけることを願っております。

（西原　俊明）